日文 教授用資料

教育情報 No.15

Educational information

【特集】

02. 新元号「令和」ゆかりの太宰府
福岡女子短期大学客員教授　味酒 安則

04. 「令和」を上手に書くために
京都橘大学元教授　新谷 泰一

06. 新しい「令和」の時代　教育に求められるものは
岐阜県瑞穂市立穂積中学校元校長　西部 巧

08. 新元号「令和」によせて

特集

新元号「令和」

本資料は，一般社団法人教科書協会
「教科書発行者行動規範」に則り，
配布を許可されているものです。

日文の教科書情報
詳しくはWebへ！ 日文 検索

模型「梅花の宴」　製作者 山村延燁
「梅花の宴」のようすを博多人形で再現したものです。
公益財団法人古都大宰府保存協会所蔵
写真提供 朝日新聞社／PPS通信社

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

特集 新元号「令和」

新元号「令和」ゆかりの太宰府

太宰府天満宮
権宮司　味酒 安則

「令和」誕生

天皇陛下の即位に合わせて、「平成」に替わる元号が「令和」となった。飛鳥時代に定められた最初の「大化」(678) から数えて248番目の元号となる。典拠となったのは、奈良時代に編まれた日本最古の和歌集『万葉集』である。その中で、「令和」は、巻5に収められた「梅花の歌」の序文が出典されている。この歌は、大宰府政庁の大宰帥 (長官) であった大伴旅人が、大宰府の邸宅で催した「梅花の宴」で詠まれた32首である。
その詩の序文の一節、

初春令月　気淑風和 (初春の令月にして、気淑く風和ぎ) を拠としている。

遣唐使によって大陸文化が次々にもたらされた時代に「和魂漢才」の道を行った大伴旅人。約100年程後、「和魂漢才」を唱え、大宰府で逝去され神となられた菅原道真。この二人が共に居た「大宰府」、「令和」ゆかりの地を見てみよう。

大宰府政庁の建設

大宰府、「おおみこともちのつかさ」と呼ばれた西の都は、なかば運命づけられた歴史のいとなみの中で誕生した。7世紀中頃、超大国の隋が滅亡し、この後に興った唐と朝鮮半島の新羅が、隣国の百済を滅ぼした。誕生は、この時、救援に出兵した大和朝廷軍が大敗を喫した直後のことである。それより、約500年の間、大宰府はこの地を動くことなく、外交の最前線として、九州の政治の中心として、わが国防衛の拠点としてあり続けたのである。

大宰府は、文化を受け入れる窓だった。それはまず、都城建設に生かされた。碁盤の目のような大路が東西南北に走る条坊制が用いられた都市計画で、古代における最新の文化情報に裏付けされたものだった。もちろん、藤原京も平安京も、この大宰府を模して造られた。しかし、そのスケールは、大宰府の比ではなかった。大宰府は、世界に対して、この両翼を広げていたのである。他の都城が、それぞれの歴史を担って殉したのに対して、大宰府は、常に西に開かれた明るい国際都市として存続した。

そして、大宰府を目指して、多くの人がやって来た。この西の都は、誰をもやさしく受け入れる包容力を備えていた。この魅力に人々は夢をふくらませた。今、この地に残る神社や寺院そして史跡や遺物の中に、歴史絵巻を織りなした偉人たちのドラマを知ることができる。大伴旅人は、軍人で政治家そして歌人、山上憶良をはじめこの大宰府で多くの文人たちと交わり優れた和歌を残している。大宰府の風に吹かれると、日本の歴史を駆け抜けた偉人たちの息づかいが感じられるのである。

太宰府天満宮の創建

その大宰府にもう一つの幽光を放つ人物が訪れる。

延喜３年 (903)、古代きっての学者政治家菅原道真は、配所の大宰府南館にて逝去された。その御遺骸は、京より追従した門弟味酒安行によって東北をめざして運ばれたが、その牛車は突然動かなくなった。生前、道真は、自分の遺骸は牛の止まった処に埋葬するように、京へ帰ることは望まぬ、と安行に遺言していた。その２年後、大宰府政庁よりの許しがあって、安行は道真の遺徳をしのんで祠廟を建てた。これが太宰府天満宮の始まりである。

菅原氏は、古代豪族土師氏を出自とする。道真の曽祖父古人が、土師を菅原と改姓するとともに、文道をもって朝廷に仕える家柄となった。時代は、嵯峨天皇の御世を頂点として、「文章経国」が、国の根幹とされ、唐風の文化の最盛期を迎えていたのである。

道真は清公、是善と続く文章博士の道統に生まれた。母は、少納言伴 (大伴) 善績の娘である。わずか5歳で和歌を詠み、11歳を過ぎて漢詩を

創作し、神童と称された。18歳で文章生、23歳で文章得業生、26歳でついに方略式に合格した。30歳の頃、島田宣来子を妻に迎え、33歳で式部少輔、文章博士となり、学者としては最高の栄進を続けた。元号を天皇に上申することを「勘申」という。文章博士の役目である。したがって、道真は「仁和」「寛平」「昌泰」の元号の勘申者の可能性がある。一時、讃岐守という地方官へ遷されたが、そこでむしろ慈父のごとき善政を行い住民に慕われた。

京へ戻ると宇多天皇の厚い信任を受け、蔵人頭などの政治の中枢に参画する。50歳の時には、唐の国情不安と文化の衰退を理由に遣唐使廃止を建議し、唐土に渡ることはなかった。そして、55歳で右大臣、そして、ついに、延喜元年1月7日、藤原時平とともに従二位に叙せられたが、その直後、急転して大宰府左遷となる。

この時代、国史上例を見ないほど、学界と政界とが深く結びついていた。それは、「文章経国」によるものだったが、一代にして天皇家の外戚にまで昇進した妬みと、政治家であるまえに実直な学者であったことが相俟って、悲運の最期を迎えたといえよう。

一方、大宰府では、左遷というより配流に近い窮迫の日々を送りながらも、ひたすら謹慎し、配所から一歩も出ることはなかった。劣悪の環境のなかで健康を損ない、道真を京で待っているはずの夫人の死去の知らせが届くと、ますます病は重くなり、延喜3年2月25日、白梅の花びらが散るように亡くなったのである。

「書写音読」の時代の中でわが国で、はじめて事象をジャンル別に体系化して研究した人で、厳しい学究と至誠の人といえる。

梅花の宴

天平2年（730）正月13日、初春の佳き日、十三夜で月は美しく、気は清く澄みわたり、風はやわらかにそそいでいる。この時、1年に1度、大宰府管内の諸国より大宰府に遣わされた朝集使たちに、大宰府官人、それ主催者の「師老」すなわち大伴旅人とその知人を合わせた32名で「梅花の宴」を開いた。漢文で記された序文にいう、梅は佳人の鏡前の白粉のように咲いているし、蘭は貴人の飾り袋の香のように匂っている。・・・漢詩にも落梅の作がある。昔も今も何の違いがあろうか。さあ、この園の梅を題として、しばし「やまとことばの歌」を詠むがよい。

梅はそもそも渡来木で、遣唐使の時代に海を渡って来た。梅は長い冬をじっと耐え忍び、正月を迎えて最初に咲く花である。それも、若葉が出るより先で、あたかも枯木に花が咲ようだ。このことで、梅は中国で最も高貴な花とされていた。天平時代前後には、舶来の梅を愛でるという趣（おもむき）が、新しい文化の象徴として古代貴族に定着し始めた。後（のち）にこの梅をこよなく愛されたのが、旅人より100年程後（あと）の菅原道真である。旅人の時代は、梅はまだ白梅で、雪のように白い梅は美しいと詠んでいる。それが、平安時代には道真自身が自邸を「紅梅殿」と呼ばれたように、紅や薄紅もできたものと考えられる。

ところで、大伴旅人は、中国伝来の梅の宴の席で、序文は漢文で記して、何故歌は「やまとことば」にしたのかという疑問が生じる。それは、旅人自身が「和魂漢才」の人物であったということである。『万葉集』4516首の歌が、大陸文化が堰（せき）を切ったようになだれこんだ時代であっても倭歌（やまと）なのである。旅人をはじめ古代天平の人々の心情が垣間見れる。

遣唐使が持ち帰る、新たな知識や情報をわが国固有の精神をもって取り込み、国家の政治、教育、文化の発展に注ぎ込んでいる。菅原道真が生涯を通して示顕（じげん）された「和魂漢才」の精神と旅人のそれが通底していると考える次第である。

著者プロフィール

● 味酒 安則（みさけ やすのり）

現在、福岡女子短期大学客員教授（博物館学）。福岡県立美術館協議会委員長や、九州国立博物館文化財保存修復施設運営委員会副委員長、九州文化財国際交流基金理事長など務める。また、太宰府市文化振興審議会会長の公職も務めた。

特集 新元号「令和」

「令和」を上手に書くために

京都橘大学
元教授　新谷 泰一

「れいわ」。心地の良い響きです。いまなお元号を用いる国は、日本のみ。改元フィーバーを見ても日本固有の文化といえるかも知れません。

「**令和**」は、その意義はさておき、音の美しさと共に、書写という点においても、書き易く収め易い。これまでの元号のなかでも屈指のバランスの良い２字といえましょう。

新しい代になり、生活のあらゆる場において、否応なしに「**令和**」と書く機会が多くなります。書写教育のなかでも「**令和**」の指導に是非時間を取っていただけたらと思います。

「令和」を正しく整えて書くには

「**令和**」が書き易く収め易いといっても、正しく整えて書くためには押さえておくべきポイントがあります。以下その要点を毛筆書写指導の視点からまとめておきます。

◆全体

1．文字の大きさを考える。
　用途や紙面･周辺の余白とのバランスを取る。
2．２字の大きさを揃える。
　同じ大きさに書いても、単独体の文字は複合体の文字より大きく見える。特に「**令**」は、左右の払いで広がりを強く感じるので、「**令**」はやや小さめに、「**和**」は大きめに。
3．縦に書く場合は、２字の中心を揃える。

◆「令」の形

1．歪みのない菱形にする。
2．中心を揃える（中心線一貫）。
　左右の払いの接点と、３画目と５画目の点を垂直に揃える。
3．左右の払いの傾斜を45度ぐらいに揃え、終筆の高さもほぼ揃える。
4．４画目を左右の払いの終筆の少し下に書く。
5．３画目の点より、５画目の点を少し大きく書く。
6．右払いは、左払いの始筆の少し下から書き始める。

◆「和」の形

1．偏は大きめに、旁は小さく。
2．旁は、偏の２画目横画の少し下に置く。
3．偏と旁の間合いに注意。
4．偏の１画目と２画目は平行に。
5．３画目の縦画は、２画目の横画の右寄りで交差させる。
6．４画目の左払いと、２画目・３画目の間の余白は同じぐらいの広さに。
7．旁の左右の縦画は、下で窄む形に。

以上、点画の組み合わせ上の留意点を列挙しましたが、文字を美しく見せるには、点画の組み合わせ方だけでなく、点画そのものの形の美しさ、筆使い、線質なども重要な要素であることはいうまでもありません。

以上の事々は硬筆書写の場合も全く同じことがいえます。

尚、参考の書は、教科書に掲載する教材を意識したもので、小学校学習指導要領「別表　学年別漢字配当表」をもとに書いています。何らかの場で、役に立つことがあれば望外の喜びです。

著者プロフィール

● 新谷 泰一（にたに やすかず）
元京都橘大学文学部教授。奈良教育大学書道科卒業、同専攻科修了。和歌山県、大阪府の高校書道教諭として勤務、退職後は書活動に専念。読売書法会理事、日本書芸院常務理事、専志会理事長。
日本文教出版「小学書写」教科書編集委員。

https://www.nichibun-g.co.jp/2020/s-shosha/

弊社ウェブサイトに、「令和」の半紙原寸大資料を掲載しております。
ダウンロードしてご活用ください。

特集 新元号「令和」

新しい「令和」の時代 教育に求められるものは

岐阜県瑞穂市立穂積中学校
元校長　西部 巧

近年、私たちの生活の中におけるＩＣＴ化の流れはすさまじいものがあります。携帯電話を児童生徒に持たせることが議論された時代は既に終わりを告げ、スマートホンにいたっては、幼児期の子どもにとって当たり前のものになろうとしています。

学校現場においても、電子黒板や実物投影機、プロジェクター、パソコンなどが当たり前のように教室に配備されるようになっただけでなく、一人一人の児童生徒が直接教師とつながることを可能にするタブレットが導入されるようになりました。また、保護者への連絡も手紙のようなものだけでなく、メール配信という手法が当たり前に取られるようになりました。まさに、早く、確実に保護者と学校がつながったのです。

授業を変えるタブレット

こうしたＩＣＴ化の流れが、今後、ますます進展していくことが期待されるのが令和の時代ではないでしょうか。とりわけ、タブレットの導入は、これまでにない授業形態を創造し、これまでにない個に応じた学びを具現させる可能性を秘めています。

タブレットの導入は今後、日本の教育の在り方を大きく変えていくものであり、また、将来の日本を担う人材の育成のために必要不可欠なものになることが予想されます。タブレットの導入は、教育現場において次のようなメリットが考えられます。

①児童生徒の持ち運びが容易で、管理がしやすくなります。
②教室だけなく、教室から離れたところでも学習が可能となります。
③授業者が大量で多彩な情報を提供することができます。
④児童生徒が自在にインターネットを活用することができます。
⑤黒板を写すといった作業を省略することができ、児童生徒が考えたり、意見交流したりする時間を確保しやすくなります。
⑥学習プログラムの提供により、個々に応じた学習を推進できます。それは、学習を苦手としている生徒だけでなく、学習を得意としている生徒への「深化」という学びを提供することを可能にします。
⑦教師と児童生徒を学校以外の場でも結びつけることができます。
⑧学級集団に馴染めない児童生徒たちにとって、在宅での学びを可能にします。
⑨タブレットに学習の成果を残すことができるだけでなく、授業者のタブレットとつながっていることから、生徒の実態把握が容易となり、授業改善につなげられやすくなります。
⑩個々の児童生徒の学習の進捗状況を把握しやすくなり、さらなる個別指導を可能にします。
⑪情報共有が容易になります。

もちろん、こうしたタブレットの授業への導入のためには、教師による教材開発だけに頼っていては、かえって教師の負担を増加させるだけなってしまうので、様々な立場から、教材やプログラムの開発が必要です。また、授業者のＩＣＴ機器の活用の熟練も必要となります。

このようにタブレットの授業への導入は、たくさんのメリットをもたらしてくれると共に、課題も見えてきます。

忘れてはならないことは…

このタブレットを代表にした授業のＩＣＴ化を推進していく上で、忘れてはならないことがあります。それは、これからの時代を生きる児童生徒に求められる「人間関係形成能力」「社会性」「自己肯定感」「協力協調して物事を推進し、成し遂げられる」などの力をどのように形成していくかという課題です。

これまでは、こうした力を特別活動や教科の授業を通して培ってきました。特別活動におい

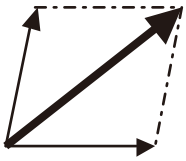
ては、学級活動・生徒会活動・部活動といった活動に取り組むことで、社会生活の模擬体験を通して、社会で生きていくための術を学び、力を合わせることでより大きなことを成し遂げていけることを学んできました。また、教科の授業では、学び合い、教え合い、助け合う等といった学習が、学力を向上させることの一助となるだけでなく、人間関係を形成する力をも培ってきました。こうした学び合い等の学習は、仲間の良さに気づくだけでなく、自分自身の良さや未熟を気づかせてくれるものでもありました。

しかし、タブレットを代表にした授業のＩＣＴ化の推進は、どうしても学習の個別化が促進されるため、先に述べた「人間関係形成能力」をはじめとする様々な力の育成が疎かになりはしないかという不安が生じてきます。

それ故に、ＩＣＴ化された授業にあっても、意図的に学び合い等の場を位置づけたり、これまで以上に特別活動や学校以外の体験活動に取り組むことを積極的に進めたりすることが大切になってくると思われます。

児童生徒の成長に大切な二つのベクトル

児童生徒にとって、学力の向上を一つのベクトルと考えると、もう一つのベクトルを「人間関係形成能力」をはじめとする様々な力の育成と考えることができます。この二つのベクトルの合成が児童生徒の成長と考えることができます。



すると、学力のベクトルが異様に長く、「人間関係形成能力」をはじめとする様々な力のベクトルが異様に短ければ、その二つのベクトルにより合成されるベクトルは小さなものとなってしまいます。一方で、二つのベクトルが共に長く、適度な間隔の方向性を持った時、そこで合成されるベクトルはとても大きなものとなります。だからこそ、この二つの力のバランスの取れた教育の提供が大切なのです。

いくら学力だけが優れていても人々の幸せにつながらないことは明らかです。人はひとりで生きていけるものではありません。人は、多くの人とのかかわりの中でこそ、幸せを見つけることができるのです。だからこそ、教育現場においてＩＣＴ化が推進されるほど、もう一つの「人間関係形成能力」をはじめとする様々な力の育成を大切にしなければならないのです。それ故に、教育現場においては、学力向上の取り組みと人と関わっていく力の醸成が、バランスよく取り組まれていくことが求められるのです。

最後に

幸いに、中学校を退職後、幼稚園にて勤務するという素晴らしい機会を得ました。園児たちと生活を共にする中で、予想を超える園児たちの好奇心の高さや、記憶する力の向上に、驚かされました。本当に、園児たちは貪欲に知識を吸収し、自分の世界を広げているのです。そして、年長の園児たちは大人になるための必要な資質は、すでに身に付けていることに気づきました。

この未来を担う園児たちの将来のためにも、「教育のＩＣＴ化」と「人として他と関わる力の育成」の両方のバランスの取れた教育の推進を願います。

新しい元号「令和」には、「美しい調和」という願いが込められているといいます。新元号「令和」には、これからの教育の在り方と符合するものであるように思えてなりません。

著者プロフィール

● 西部 巧（にしぶ たくみ）

昭和56年4月より岐阜県の教員に採用され、平成10年度より3年間岐阜県中央子どもセンターにて児童福祉司を務めた。平成17年度より3年間岐阜教育事務所にて、社会教育を担当。平成20年4月より安八町立登龍中学校長となり、瑞穂市教育委員会学校教育課長、瑞穂市立巣南中学校長を経て、平成25年4月より瑞穂市立穂積中学校長を務め、平成29年3月末に退職。平成29年4月より加納学園こばと西幼稚園長を務め、平成31年3月末に退職し、現在に至る。

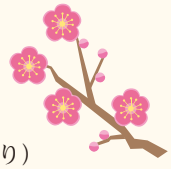
新元号「令和」によせて

新元号である「令和」にはどのような意味が込められているのでしょうか。新元号にまつわる話題をお届けします。

新元号「令和」の出典は万葉集であり、日本の古典に由来する元号は初めてということで話題となりました。万葉集は、大伴家持が編纂したとされる、現存する日本最古の歌集です。天皇や皇族から農民まで、幅広い階層の人々が詠んだ、約4500首の歌が収められています。

初春の令月にして、気淑(よ)く風和(やわら)ぐ。
梅は鏡前の粉(ひら)を披き、蘭は珮後(ばいご)の香を薫らす。

（小学館『新編日本古典文学全集7　萬葉集②』より）



これが「令和」の典拠である万葉集の一部、「梅花の歌三十二首」の序文の一節です。「令」という漢字には、「令嬢」などの言葉からわかるように、「よい」という意味があり、「令月」で「よい月」を表します。「和」は、「やわらぐ」「なごむ」という意味を表します。この序文からは、和やかな雰囲気で宴が催され、美しい梅に心を寄せている様子を感じとることができます。

では、「梅花の歌三十二首」が生まれた背景はどのようなものだったのでしょうか。

天平2年（730年）、太宰府にあった大伴旅人（家持の父）の邸宅で「梅花の宴」が開かれました。そこには、旅人や山上憶良などの知識人たちが集まり、梅の花をめでる中で32首の歌が詠まれました。これが「梅花の歌三十二首」です。外国からきたばかりの珍しい植物である梅を和歌に詠むという、当時としては最先端のテーマを取り入れた宴だったと考えることができます。

なお、旅人邸があった大宰府は外交や国防のために筑前の国（福岡県）に置かれた地方行政機関のことです。太宰府に滞在し、万葉集に優れた和歌を残した旅人や憶良らは、後に「筑紫歌壇」と呼ばれるようになり、彼らの作品は今も国語の教科書に掲載され、親しまれています。

序文の一節を通じて、美しい情景が目に浮かんできたのではないでしょうか。春のはじまりにふさわしい、美しい和歌から生まれた「令和」。みなさんは「令和」のはじまりに何を思いますか。

教育情報　No.15

日文 教授用資料
令和元年（2019 年）6 月 15 日発行
編集・発行人　佐々木秀樹
発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33470

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171
東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618
九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938
東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F•B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261
北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690